

"学ぶ"に寄り添う
コミュニケーションマガジン

社内報アワード
受賞

NEWS LETTER

SEIGAKUIN NEWSLETTER

& Seig

No.
287
Dec.2023

特集

あ地域と
共に
ある
という
こと

巻頭座談会

学校法人聖学院理事長
小池 茂子

地域連携・教育センター所長
若原 幸範

株式会社地域デザインラボさいたま
代表取締役社長
青木 大介

第4回 聖学院SDGsコンテスト
フォト&ムービー部門
受賞作品発表

各校・各園在校生インタビュー
学ぶ人たち
聖学院大学 高寺 美桜さん

関係団体の皆さんにインタビュー
支える人たち
株式会社アイコーメディカル 伊藤 尚美さん



140th Anniversary of the
Disciples' mission to Japan

CONTENTS

特集

01_ 地域と共にあるということ

学校法人聖学院理事長と地域連携・教育センター所長と
埼玉の課題に取り組む企業の代表によるトークセッション

03_ &Talk

聖学院の地域連携

07_ focus

07_ コミュニティサービスラーニングⅠ・Ⅱ
[聖学院大学]

08_ 荒川区社会福祉法人・団体との
連携・交流
[聖学院中学校・高等学校]

09_ 北とびあ演劇祭
[女子聖学院中学校・高等学校]

10_ キリスト教活動としての『花の日』
[聖学院小学校]

各校・各園在校生インタビュー

11_ 学ぶ人たち [高寺 美桜さん]

関係団体の皆さんにインタビュー

12_ 支える人たち [伊藤 尚美さん]

13_ 第4回 聖学院 SDGs コンテスト フォト&ムービー部門「教えて あなたの SDGs」 受賞作品発表

14_ Seig NEWS

17_ 2023年、学校法人聖学院は創立120周年

18_ 聖学院の歴史(年表)

120年の轍を歩む

19_ 聖学院歴史探訪

聖学院教育の歴史

—聖学院の創設と発展 女子聖学院 3—
[EPISODE #23]

聖学院ニュースレターアンケート

QRコードから本誌の感想をお寄せください。アンケートに回答いただいた方の中から抽選で10名様に「聖学院120周年記念オリジナルコースター」をプレゼント！ いただいたご意見は、編集の上、本誌にてご紹介させていただくことがあります。



●有効回答期間

2023年12月23日～2024年2月17日

●当選発表

当選者にはメールにてお知らせします。



本アンケートに関するお問い合わせ

聖学院広報センター Tel 03-3917-8530

編集/学校法人聖学院 広報センター

デザイン/株式会社キュー・ジー

発行日/2023年12月14日

地域と共に あるということ

地域には図書館や公民館など、学校以外の学びの場があります。しかし、その土地の教育の基盤となるのはやはり学校です。子どもたちや学生にとって学校は学びの場であると同時に、居場所でもあります。

地域にとって学校があるということはどういうことなのか。

学校の存在意義を地域、社会教育という側面から考えてみたいと思います。

&Talk

特集

地域と共にあるということ

聖学院大学の地域連携の取り組みと、
埼玉県の実際の課題をテーマに
地域連携の本質、その背後にある想い、
今後の可能性について考察します。





こいけ しげこ
小池 茂子

青山学院大学大学院文学研究科教育学専攻博士後期課程単位取得済退学(文学修士)。現在、聖学院大学人文学部教授。2018年度より聖学院大学学長補佐、副学長、人文学部長、大学院文化総合学術研究科長を歴任。2023年4月より学校法人聖学院理事長、聖学院大学学長に就任。



わかはら ゆきのり
若原 幸範

聖学院大学政治経済学部准教授、地域連携・教育センター所長、ボランティア活動支援センター所長。北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士(教育学)。専門は社会教育学。主な研究関心は、地域の内的発展と主体形成への学習・教育。



あおき だいすけ
青木 大介

早稲田大学政治経済学部経済学科卒業、あさひ銀行(現:りそな銀行)入社。米国ノースカロライナ大学にて経営学修士(MBA)取得。埼玉りそな銀行小川支店長などを経て、2021年10月より株式会社地域デザインラボさいたま代表取締役社長に就任。

ボランティア活動、産官学連携、公開講座など学校と地域は様々な形で関わっています。その関わりは、在校生、在学生にとっては学びの場であり、地域の方々にとっては知的欲求や成長を促す機会となります。地域連携にはこのように教育的な視点があるため、学校内の教育と異なる社会教育という側面を持ちます。教育の一環として地域連携を考えると、学校の意義や在り方、地域連携の新しい形が見えてくるかもしれません。また、今年度スタートした第2期聖学院ビジョンでも、聖学院が提供する価値として「地域への貢献」を明示しています。生涯教育が専門で、聖学院大学学長でもある小池茂子理事長、社会教育が専門で、聖学院大学の地域連携・教育センター所長である政治経済学部の若原幸範先生、そして地域の課題解決のために産官学等様々な組織をつなぐ活動をしている株式会社地域デザインラボさいたま(以下ラボたま)の青木大介代表取締役社長に集まっていたとき、社会教育とは何か、生涯学習の意味、地域と学校のつながりについてお聞きしました。

地域社会と学校、それぞれの教育

—社会教育とは具体的にどのようなものですか？

若原 日本の公教育は二本柱で作られています。一つは学校教育、もう一つは社会教育です。学校外で行われている教育は基本的に全て社会教育になります。

ます。公民館、図書館、博物館などが代表的な社会教育施設です。まちづくりなど、地域の人たちの持っている関心やテーマ、課題に添えていくために、学びをキーワードに人をつなげていき、地域の力を高めていく仕事をするのが社会教育です。

また、地域社会の本質的な機能に人を育てる機能があります。子育てはもちろん大人も含めて。ただ近代以降は「学校」という機関ができ、子どもの教育については学校が専門的に担う事になりました。それを再び、地域の中心で学校と共に子どもを育て、学校が地域の教育拠点の一つとして機能するようにしようという流れが、国や行政も含めてあります。

小池 社会教育は、学校教育のように制度的にそれを強いられる教育ではありません。ですから、やってもやらなくても自由で、そこが社会教育の良さです。ただ個人の自発的な行為である「学習」という言葉に対して「教育」には目的があります。社会教育は「教育」なので、そこには目指す教育目標があり、教育の機会提供や支援を行う側はそれを目指して働きかけを行っているのです。

地域での活動を、

学生の学びに還元することが重要

—地域連携にどのように取り組んでいるか教えてください。

青木 私たちラボたまは、金融機関の子会社として地域連携と地域の課題解決に取り組んでいる会社です。銀行のネットワークを活用し、住民、企業、行政、教育機関など様々な方々をつなぎ、地域の課題解決を目指しています。このような地域連携のハブ機能が私たちラボたまの役割です。



小池 社会が大きく変化する中で、大学は学内だけでは教育研究を完結できない時代になっています。大学を地域に開き、地域の評価を受けながら、地域にないものはならない存在として認知してもらう必要があると思います。大学の知的、人的、物的財産を学生のために使うとともに地域に開いていくことを、学長としてやっていきたいと思っています。

その一環として、埼玉県高齢者福祉課と協定を結び、埼玉県在住の55歳以上の人を対象にリカレント教育講座(大学の開放授業講座)を実施しています。これは大学の一部の授業を一般の方に開放する制度です。現役の学生と中高年の人たちが同じ教場で同じ授業を受ける。異年齢が共に学ぶことで、教育的感化が生まれることを期待しています。地域の方は生涯学習の一環として学び、学生は生涯学習続ける大人の姿を身近で見ることが、その姿



2023年度、大学と上尾市の官学間連携事業「パープルリボンプロジェクト（女性に対する暴力をなくす運動）」が始動。11月15日（水）に上尾市男女共同参画社会推進センターとの協働で、パープルリボン作りを行いました。



地域連携、生涯学習、廃校跡地活用など、地域と学校について多角的に話っていました。

勢を自分のライフデザインに生かすことができます。

また、企業が取り組んでいる社会貢献活動に学生を参加させたいと考えています。フードパントリーや子ども食堂に取り組んでいる地元企業から、「問題意識を持って来ている学生にボランティアとして来てもらえませんか？」というお話をいただいています。私たちもぜひ協力していこうと思っています。

若原 最近ありがたい事にSDGsの取り組みでも注目していただいて、多くの企業からオファーが来ています。

青木 地域の方たちと課題解決を考えるときに、ワークショップを行うことがあります。その中に大学生にボランティアとして入ってもらうと、新しい視点や感性が生まれ、ワークショップの活力が1段、2段上がります。地域への大学生の参画は非常に意義があると感じています。

小池 大学は、学生をマンパワー提供という意味だけでボランティアに参加させるのではなく、現代社会の課題、地域の課題に直に触れる機会なので、ボランティアの経験を彼らの学びに結びつけていくべきだと思えます。そうすることによって、学校にも地域社会や企業にもメリットが生まれ良い関係になります。それが私が考える地域連携のイメージです。

しかしこの関係を成立させるには、調整窓口が必要です。学生が地域活動

に参加するには企業、団体側の連絡窓口や交通費などの条件設定が必要です。また、大学側も学外での貢献活動が学生にとって有益かどうか判断しなければなりません。そこで調整、すなわち「つなげる」役割が重要となってきます。企業、団体に関しては、ラボたまさんがその役割を務めてくださっていると思います。大学側は、地域連携・教育センターの他に、ボランティア活動支援センター、サステイナビリティ推進センターなど連携を推進する窓口となる部署の整備を進めています。

若原 小池先生がおっしゃる通り、地域連携は課外活動ではあっても教育の一環です。学生にとって価値のある活動につなげたいと思っています。聖学院には地域や企業と大学をつなぐ各センターにコーディネーターがいて、個々の学生にあった活動につなげつつ振り返りや学習の機会を設けています。その機会をさらに増やしていくことや、大学の正課のカリキュラムとどう上手く組み合わせていくのが今後の課題です。

青木 今日（この座談会の前に）色々お話を聞いて、聖学院大学がボランティア活動に力を入れていることに感銘を受けました。身近なところでボランティア活動をしている学生がいると、周囲の学生も少しずつ意識が高くなります。そして自分から地域に出て行ってみよう、そこから何か学びを得

ようという動きにつながります。聖学院大学の取り組みは地域にとって良いインパクトになっているという印象を持ちました。

廃校跡地の利活用から見える学校の存在意義

——埼玉県の地域課題について教えてください。

青木 埼玉県は高齢化が速いスピードで進んでいます。若年層がどんどん減っていく中で学校も無くなっています。その学校の跡地をどう地域の活性化に使っていくかというようなお話もかなりいただきます。

若原 基本的に学校は公共施設なので、廃校跡地の活用は行政の役割です。ただ行政だけでは対応しきれないところがあります。そういう所を民間の、特に企業の視点から取り組むことに意義があると思います。

青木 埼玉県西部の小川町で約1300世帯が暮らす住宅団地の中の小中学校が廃校になることに伴い、その跡地活用の相談をいただきました。地域の方々や事業者と協議を進め、校舎の中に新しいビジネスが生まれるコワーキングスペースやシェアオフィス、周辺住民が集まれるカフェができていま



す。地域には独居老人の方も多いので、高齢者向けサービスの提供でより安心して暮らせる地域にしていきたいことや、お試し居住スペースを作って移住希望者に実際に生活していただき、気に入ったら団地の空き家を買ってもらおうということも考えられます。そういった形で小中学校跡地を核にして、周りの団地も含めていろいろな人が交流することで地域の活性化を図っていきます。

若原 学校は本当に地域にとって重要な存在で、単に子どもたちを教育する施設ではありません。地域の人たちの象徴であり、かつて通った場所であり、記憶が蓄積された場所でもあります。子どもが減ったなら廃校にして、別の大きな学校に通えば良いということではなく、その地域の象徴が一つ無くなるという大きな問題です。そのため廃校の跡地活用に際して、地域の拠点としての機能をしっかりと維持していこうという取り組みはとても重要です。

小池 コミュニティの中でその学校に通っていた、そこで生活していたという記憶が、その地域の人たちの絆になっています。「あの学校を卒業したよね」という会話が年齢を超えて共有できる。やはり学校には、その地域の人たちをつなぐハブとしての機能があらうと思います。

青木 学校は地域の方々の思い入れが強い場所でもありますし、逆に言うとうし方によつては人が集う、非常にポ

テンシヤルのある「場」だとも捉えられます。そういう意味でも利活用の進め方はとても大事だと思います。

高齢社会における社会教育、地域と共に価値をつくる学び

——地域連携の意義、今後の展望などを教えてください。

小池 日本社会がこれだけ高齢化し、長寿化が進展する中で、若い時にしか学ばないという考えは過去のものになっていくと思います。これからは、自分で学びを自由に選択しライフレデザインをしていくことが必要です。学びを仕事のために生かしても良いし、自分の楽しみのためでも良い。

日本の高齢化の進展は、社会保障費の財源を若い人たちが背負わなければいけないため、高齢期の人たちと若い世代が対立している意識構造があります。しかし、対立ではなく共存を模索することが私たちのすべきことではないでしょうか。そのためには高齢者も社会に貢献していくべきですし、そのためには学ぶことが必要です。大学のような教育研究機関はそういう場を提供していくことが今後ますます期待されていくのではないかと思います。

若原 学生が地域に出て行って活動しながら学ぶということは、学習することの本来の意味や楽しさに触れることでもあります。学校での学びは、どうしても自分の生活や社会と関連づけ

て理解しにくい、実感しにくいところがあります。しかし地域での活動は自分が学んできたことを生かすことができ、地域にとつても意味があり、自分にとつても価値があるということを実感できます。さらに学生が地域に入っていくことで、地域の人たちの学びも喚起します。これは多分地域の人たちにとつても楽しいはずですが、楽しいという抽象的ですが、これもまた地域連携の大事な価値であり側面だと思えます。



青木 聖学院大学はボランティア活動や公開講座など、地域に開かれた様々な取り組みをしていると思います。そのどれもが大学の内側から見ると地域に大きなインパクトを与えています。そういった取り組みをこれからもぜひ続けていっていただき、私たちもそこに協力できることがあれば参加し

ていきたいと思っています。

小池 今年、本学は埼玉中小企業家同友会と協定を結びました。その一環として同友会会員の企業家に大学においていただき授業の内外で学生たちにお話をいただく予定です。学生にとつて、仕事の現場で何が本当に大切で、どんな苦労があるのかを聞ける貴重な機会になることではないでしょうか。また経営者の皆様に直接お話しただくことで、企業のウェブサイトや資料だけでは見えてこない仕事の面白さや会社の魅力が学生に伝わると思えます。お話に興味を持った学生が、同友会の会社に就職し、本学で学んだことを企業のために、ひいては地域のために生かしていける、そういう良い循環ができることを願っています。

聖学院は埼玉に所在する大学なので、地域の企業に教育の成果を届け、聖学院の良さを評価していただけるよう、小さなことから始めていこうと思っています。

(取材日/2023年10月)

聖学院大学の地域連携例

- 公開講座**
さいたま市、上尾市の教育委員会と連携し成人の方たちを対象に公開講座を開催しています。大学の教員または元教員が講師を務め、持続可能な社会や英会話についての講座が開設されています。
- リカレント教育講座(開放授業講座)**
埼玉県高齢者福祉課と大学の協定で、埼玉県在住の55歳以上の人たちが、大学の現役学生向けの授業に参加できる制度です。
- 子ども大学あげお・いな・おけがわ**
上尾市、伊奈町、桶川市、日本薬科大学、聖学院大学が連携し、小学生を対象に大学の授業を体験してもらう講座です。上尾市、伊奈町、桶川市在住の小学校5、6年生を対象に、夏休みに連続4回開催します。大学の研究者が自分の専門分野を小学生に分かりやすく講義します。
- 高大接続**
埼玉県立上尾南高校の探究の時間をコーディネートしました。上尾南高校の生徒を大学に招き、青年期の心理をテーマとした心理福祉学科の心理学の授業を体験してもらいました。

社会貢献活動を体験で終わらせず、
学生一人ひとりの学びに還元する



子どもが安全かつ自由な発想で遊べる場所を作る「冒険はらっぱプレイパーク」に参加した猪股勇斗さん(政治経済学科4年)。活動を通して、自分のゼミのテーマについて新しい視点を得たそうです。

聖学院大学には「コミュニティサービスマーケティング(以下CSL)Ⅰ・Ⅱ」という基礎総合科目があります。2年生以上のどの学科の学生でも受講できる授業です。サービスマーケティングとは、知識として学んだことをサービスマーケティング(社会貢献)活動に生かし、またその体験を自分の学びや進路選択への新しい視点として還元する教育プログラムです。活動だけを見るとボランティア活動に近いのですが、社会課題をどう解決するかは主眼を置く自主的なボランティア活動に対し、サービスマーケティングは単位化されており、社会課題への取り組みと学びが同じ比重で展開していきます。2015年頃から聖学院大学でも、地域社会に触れる経験をボランティア活動だけにとどめず、教育プログラムとして位置付けようとする検討が始まりました。そして導入されたのが「CSLⅠ・Ⅱ」です。この授業を通して、社会貢献活動の楽しさを知ってもらい、自主的にボランティア活動に参加する学生を増やすのも目的の一つです。

「CSLⅠ・Ⅱ」は、事前学習、活動、振り返りの3つで構成されています。この中の活動はNPOや社会福祉法人など、協力いただける指定の外部団体に学生が出向く形で行われます。どの団体で活動するかも学生が決めます。そのため事前学習では、学生が自ら外部団体に出向き、ヒアリングをし、活動先を決めます。活動先が決まったら、8月の夏

休みから11月までの期間、実際に活動を行います。最後に、活動で得たものをより深く考え、自分の学びに落とし込むための振り返りを行い、1月の報告会でプレゼンテーションを実施します。報告会では受け入れ先団体の方も招き、学生へのコメントをいただきます。

「私たちはみんな生活者であり、一人の市民です。誰しもどこかの地域に所属して暮らしています。その実感を取り戻す。サービスマーケティングにはそういう効果もあると思います。また、一連の活動を通して学生には、課題に挑むかっこいい大人たちの姿を見てほしいです。卒業後、地域に対する視点も変わりますし、その地域に何か課題があっても、その課題に挑んでいる大人がいるという希望が持てます。さらには自分もその仲間に加わろうという循環が生まれればうれしいです」とこの科目を担当する川田虎男先生は語ります。



川田虎男先生

振り返り(リフレクション)

振り返りは「CSLⅠ・Ⅱ」の中でも重要な役割を担っています。学生は活動を通じて心が揺さぶられます。しかしそこで終わってしまうと学びへの還元が得られません。川田先生は振り返りについて「地域での活動は、身近なところで困っている人がいること、その背景となっている社会についても考えるきっかけとなります。



それがさらなる気づきや学びへとつながっていきます」と言います。

北とびあ演劇祭

「でる・みる・つくる」

アマチュアとプロが

垣根を越えて集う演劇祭



他の劇団の公演の手伝いをする女子聖学院中高の演劇部生徒

東京都北区、王子にある北とびあでは、毎年9月～10月の時期に『北とびあ演劇祭』を開催して劇団・団体の公演やワークショップなどの企画公演を行っています。演劇祭がスタートしたのは今から23年前の2000年。北とびあ開館10周年を記念して『北とびあアマチュア演劇祭』という名前で11劇団・団体の公演からスタートしました。

女子聖学院中高の演劇部は、2000年の初回から毎年欠かさず参加しており、今年2023年は通算24回目の出演となりました。2023年の演目は「明日へのバトン」。いじめ問題に立ち向かう新任教師の姿を描いています。また、女子聖学院中高演劇部の卒業生を中心に結成された劇団「碧楽（へきらく）」も参加しており、「二十一時、宝来館」という演目の劇の公演を行いました。演劇祭には女子聖学院中高以外の中高演劇部も出演しており、今年も女子聖学院中高を入れて5つの学校が参加し、学校間での交流を深めています。

2023年の北とびあ演劇祭ではアマチュアとプロ合わせて約30の劇団・団体の公演やワークショップが実施されました。この演劇祭は、地域の人たちが自主的に組織している「北とびあ演劇祭実行委員会」が行っているのが特徴であり、他の自治体の演劇祭と一味違うところです。北区文化振興財団はそのサポートをしています。演劇祭実行委員会はボランティアの活動ですが、演劇への熱意がある方なら誰でも実行委員になること

ができます。ただし、実行委員はワークショップなどのプロジェクトを担当するので正式なメンバーになる前に研修期間があります。ご興味のある方は北区文化振興財団までお問い合わせしてみてくださいいかがでしょうか。(※)

北とびあ演劇祭のキャッチフレーズは「でる・みる・つくる」です。観客として、公演者として、そしてワークショップの参加者として様々な楽しみ方ができる、アマチュアとプロが垣根を越えて集う演劇祭です。参加している劇団同士はお互いの稽古を取材し、本番の公演を手伝い、そして観劇の感想をエンディングイベントで伝えあいます。

女子聖学院中高演劇部は、「とうきょう花菜」という劇団の公演のお手伝いをして（写真上）、かわら版（写真左上）に紹介文も書いています。



演劇部顧問、筑田先生

女子聖学院中高演劇部

女子聖学院中高の演劇部は北とびあ演劇祭に2000年の初回から継続して毎年参加しています。スタート当初から演劇部顧問の筑田周一先生は24回継続参加で、演劇祭一の古参の先生。下の写真は2023年の公演「明日へのバトン」。



キリスト教活動としての『花の日』

地域の方々に

感謝の気持ちを伝えて、

郷土愛を育む



北区役所にて。やまだ加奈子区長にメッセージカードとお花を手渡しました。

多くのミッションスクールで行われている『花の日』、皆さんはご存知でしょうか。聖学院小学校では長年にわたり『花の日』の行事が守られてきました。

「『花の日』とは、キリスト教の行事の一つで、花や人など万物に命を与えて守ってくださる神様に感謝をし、隣人愛の心で日頃からお世話になっている地域の方々にも感謝の気持ちを伝える日です。1856年6月第二日曜日にアメリカの教会で花を飾る子ども礼拝が行われたことが起源とされています。それがアメリカのメソジスト教会（※）で子どもの日と結びついて現在の花の日となり、キリスト教伝道とともに日本にも伝わったと言われています」と中村謙一チャプレンは話します。

教会では『花の日』は6月の第二日曜日となりますが、聖学院小学校では毎年その前後に行っています。午前中はチャペルで礼拝を捧げ、午後には、5・6年生からなる宗教委員会の児童たちが学校を代表して、区役所や教会、医院や子どもクリニック、高齢者集合住宅や商店街など、地域を支える方々を訪問します。そして日頃からお世話になっていることへの感謝の気持ちを丁寧な言葉で伝え、それが書かれたメッセージカードとともに、持参した花束を渡します。

このコロナ禍で訪問ができない年が続きましたが、今年は4年ぶりに訪問することができました。医院や子どもクリニックへの訪問では、児童たちが

『花の日』の意味

「『花の日』は、心の美しさを大切にする日です。花をめぐるだけではありません。神様に用いられて愛ある行いをすれば、花のように美しい人生になるということです。」と中村チャプレン。聖学院小学校の児童たちは心の中の花を一人ひとり大切に育てているのです。



写真はいつも給食を作っているアイコメディカルの方々。感謝の気持ちを伝えます。校内の方々にも感謝の気持ちは忘れません。

来てくれたことを大変喜び、記念写真を撮らせてほしいとおっしゃる方もいたそうです。児童たちは『花の日』を通して、感謝されることを体験し、自分が役に立てたことで自信を持てるようになります。中村チャプレンは「イエス・キリストは自身が生活をしたその地域に根差し、隣人を愛して人々を助けました。児童たちも隣人である地域の方々を助けることに関心を持ち、励ますことの喜びを『花の日』の体験を通して知ることができるのです」と語ります。

一般的に私立小学校は公立小学校とは異なり、地域との関わりがむずかしいとされています。その中であって聖学院小学校はミッションスクールらしいかたちで地域との関わりを持ち、地域を愛する心、郷土愛を育んでいます。

※キリスト教のプロテスタント諸教派の一つ。

学ぶ人たち

「在学生の活躍」

1

聖学院大学 人文学部
日本文化学科4年
高寺 美桜さん

PROFILE

幼少の頃から絵を描くのが好きで、本格的に絵の具を使い始めたのは中学生から。アクリル、透明水彩などを中心に制作。第93回国展 国画会写真部「小中高生フォトフェスタ」奨励賞受賞。芸術団体「現展」に所属。



高寺さんが大川小学校の伝承館で出会った赤いランドセル。中身が見えるように展示されていて、その子の当時の生活を垣間見ることができます。高寺さんは小一時間ランドセルを眺め続けていたと言います。

被災地で受け取った感情を、表現という形で共有したい

「風光る春展」。今年、聖学院大学のヴェリタス祭において、宮城県石巻、女川をテーマにした展示が行われました。画家としても活動する日本文化学科4年の高寺美桜さんの企画です。「被災地には未だに感情を消化できないままの人、心に深い傷を負ったままの人がいます。同時に、力強く歩み出している人もいます。街もまた爪痕が残る場所と復興していく場所があります。風化させないだけではなく、被災者たちが重ねてきた春と、未来に向かって新しくなりつつある東北を伝えたい」と高寺さんは言います。

高寺さんがこの展示をしようと思ったのは東北ボランティアスタディツアーに参加した時でした。スタディツアーは、学生が東北で震災のことを学びつつ、自分たちに何ができるかを考える活動です。高寺さんは津波の被害に遭った大川小学校の伝承館で、赤いランドセルの展示と出会います。生きていたら高寺さんと同じ年齢だった女の子の持ち物です。そのランドセルに強く心を揺さぶ

られた高寺さんは、この子が生き残った未来のために「こんなことをやっただよ」と言える生き方がしたいと思ったそうです。また牡鹿郡女川町には「しあわせの黄色いポスト」という筒形のレトロなポストがあります。瓦礫の中から見つけ、復興の象徴として設置された黄色いポストを見て、未来に向かう人々の想いを、力強さを感じました。これも被災地のリアルな姿だと思い、東北の多面性を形にすることにしましたそうです。

ヴェリタス祭開催期間、スタディツアーで震災当時の話や復興の様子を案内してくれた現地地団「Team大川」も招待しました。大学生、教職員一般来場者と「チーム大川」の方たち、みんなで東北について語り合う場所が誕生しました。高寺さんは「私が東北から持ってきたかったものが実現しました。社会人になっても東北には関わっていきと思えます」と言います。東北との出会いが、高寺さんのライフワークになりました。

※石巻市立大川小学校の出身者たちが立ち上げた、被害を受けた小学校周辺にコミュニティを再生しようと活動している団体。

高寺さんのもう一つの企画「ある春のための上映会」

「ある春のための上映会」は、石巻市立大川小学校で被災した佐藤そのみ監督の映画上映会。震災の被害者となった妹への手紙を中心に綴るドキュメンタリー映画「あなたの瞳に話せたら」。震災直後、同じ家族を失いながらメディアの取材に応える中学生の主人公と、まだ心の整理がつかずメディアの前に出れないその友だちを描いたフィクション「春をかさねて」。その2本を上映。「ある春のための上映会」を知った高寺さんは、スタディツアー直後に上映会に参加。色々考えさせられたと言います。そして、聖学院大学でも上映したいと監督に直接連絡をとり、大学での上映会企画を成立させます。上映会当日には佐藤監督にも来場いただき、座談会と映画を見た人々とのグループワークも行い、大好評でした。



聖学院幼稚園・小学校の
給食(スクールランチ)を
より美味しくしてくれる
コーディネーターさん



支える 人たち

聖学院を外から支えてくださっている人たちに
聖学院への想いをうかがってみました。

No.
09

株式会社アイコーメディカル
いとう なおみ
伊藤 尚美 さん

人間が生きていく為に必要な「食」に興味を持ち、大学で栄養学を専攻。管理栄養士の資格を取得。大学卒業後は異業種に就職。その後、特にこれからの将来を担う子どもたちの「食」に関わりたいという思いから、幼児食を得意分野とするアイコーメディカルに転職。現在は関東エリアマネージャーとして聖学院幼稚園・小学校を担当。

子どもたちの笑顔が見られる
美味しい給食を作りたい

美味しいと評判の聖学院幼稚園、聖学院小学校の給食・スクールランチ。子どもたちも大好きです。給食・スクールランチを作っているのは株式会社アイコーメディカルです。その味の秘訣、聖学院の昼食について株式会社アイコーメディカル関東エリアマネージャーの伊藤尚美さんにお聞きしました。

「株式会社アイコーメディカルは幼稚園、保育園、こども園、小中学校等に昼食やおやつを提供させていただいている会社です。千葉にセントラルキッチンを持っており、肉や魚を中心に一部食品の一次調理を施してから各学校に届けられます。その後、学校の厨房にて弊社スタッフが仕上げの調理を行い、給食として提供しています。複数校の食材をまとめて扱えるため、学校独自で調理をするより食品ロスが少なく生肉の処理等をはじめ衛生管理も徹底できます。また作り立ての温かい状態で出せるのも特徴です。私の仕事は、現場に入り子どもたちの食事の様子を見たり、先生からいただいたご要望をメニューにフィードバックすることです。どんなメニューでも食べてもらえないと栄養になりま

せん。栄養面や衛生面はもちろん、子どもたちを笑顔にできる美味しい食事がづくりを一番大切にしています。

聖学院のお仕事をしようになつて、一番驚いたのはスクールランチです。聖学院小学校では給食をスクールランチと言つて、縦割りのグループでお昼ご飯を食べます。1年生から6年生まで各学年1名ずつ、計6人で一つのテーブルを囲みます。上級生は下級生を見守り、下級生は食事の準備や上級生としての立ち居振る舞いを学んでいきます。上級生の気配りも自然で、異学年同士でも楽しそうに食事をしている様子を見て、とても素敵だなと思いました。」

伊藤さんは、野菜の素材を生かすためのカット方法や、調理時間、色彩、食べる時間に合わせたの味付け、食感など五感に訴える食事作りを目指しています。また子どもたちの知力、徳育、体力づくりのためのバランスに富んだ食事作りを取り組んでいます。「子どもたちから美味しかったと言われると何よりうれしいです」と語る伊藤さん。美味しさの陰には、伊藤さんのきめ細やかな心遣いが隠されています。

聖学院SDGsコンテスト

フォト&ムービー部門

「教えて あなたの SDGs」 受賞作品発表

学校法人聖学院が主催する聖学院SDGsコンテスト。

毎年SDGsにつながる写真や動画を募集して行われています。

今年度もフォト&ムービー部門、ソーシャルアクション部門、英語スピーチ部門の3部門でコンテストを行いました。

第4回となる今回、フォト&ムービー部門は「教えて あなたの SDGs」をテーマに作品を募集したところ、

在校生からも多数の応募をいただき、応募総数は写真と動画を合わせて249作品となりました。

その中から審査によって選ばれた8作品をご紹介します。

※ソーシャルアクション部門と英語スピーチ部門についてはWebにて受賞作品を公開しています。

また、Webにて各部門の受賞作品概要・審査員講評なども公開しています。右のQRコードからご確認くださいませ。



最優秀

【最優秀賞】

美しきごみ

飯泉 結羅 さん



今回、最優秀賞に選んでいただけてとってもうれしいです。また、応募の仕方が分からなかった私を手伝ってくださった先生方に感謝いたします。私はSDGsの取り組みも日本の伝統文化もどちらも守っていただけることを願い、この写真を投稿しました。



優秀

【優秀賞】

故きを温ねて新しきを知る

大竹 俊成 さん



このたびは、優秀賞に選んでいただきましてありがとうございました。今年の夏に家族で関西旅行に行ってきました。タイミングよく「大仏さまのお身拭い」の日に奈良を訪れたため、大仏の大きさを人の大きさ基準で表現した写真を撮ることができました。約1300年前にもSDGsと同じような目標があったこと、その目標に対する人々の思いがとてつもなく大きかったこと、がこの写真から伝われば幸いです。



優秀

【優秀賞】

屋上の細道

F.K さん



受賞という機会を頂き心より感謝いたします。これまではSDGsという視点で風景を捉えることに難しさを感じていました。そんな中、聖学院中学校高等学校の屋上に足を運んだ際、日常の「当たりまえ」な中に生物と共存している風景があることに気づき、今回の撮影に至りました。私たち人も地球上の命の一つであることを意識して他の生物と共生していく生き方を改めて考えさせられました。



【佳作】

挑戦を友達と

大泉 萌音 さん



【佳作】

ビーチクリーニング

石島 大輔 さん



【佳作】

人と木の共存

太野 晶貴 さん



【佳作】

Tシャツアップサイクル

小林 葵 さん



【広報センター長賞】

出番を待つ革靴

A.M さん

まだまだあります!

Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。



学校法人 聖学院

聖学院創立120周年 記念行事報告

1903年、現在の文京区本郷の地に誕生した聖学院神学校から聖学院の歩みは始まりました。“神を仰ぎ 人に仕う”この建学の精神を土台に真理を探究すること、神と人間を知ること、社会に貢献することを目指す歩みを覚え、2023年10月に駒込キャンパス、さいたま上尾キャンパスにおいて記念礼拝や記念式典・音楽会などを挙行了しました。

●10月26日(木)

聖学院幼稚園・聖学院小学校 合同記念礼拝

聖学院中高の講堂にて、合同礼拝を行いました。礼拝後、田村園長から「聖学院140年と120年のあゆみ」のお話があり、貴重な写真とともに歴史を振り返る時を持ちました。



●10月28日(土)

記念式典 パイプオルガン奉献

各校教職員が大学チャペルに一堂に会し、来賓とともに感謝の礼拝を捧げました。この日完成したパイプオルガンの演奏も行われ、荘厳な音がチャペルに響きました。



パイプオルガンが完成した聖学院大学チャペルに教職員一同が集う(10月28日)

●10月30日(月)

聖学院中高・女子聖学院中高 合同礼拝

聖学院中高の講堂にて、合同礼拝を行いました。有志生徒の発表では、120年の歴史を受け止め、次世代に受け継いでいくことの必要性を力強く語ってくれました。



●10月30日(月)

聖学院みどり幼稚園 記念礼拝・音楽会

聖学院大学チャペルにて、記念礼拝を行いました。赤田園長のパイプオルガンの演奏や保護者の合唱サークルとの合唱を通して、120周年の喜びを分かち合いました。



映画会

一みちのく秋田ー赤い靴の女の子

●10月13日(金)

駒込キャンパス

●10月19日(木)

さいたま上尾キャンパス

聖学院創立の母体となったディサイプルス派の女性宣教師として明治時代に来日し、秋田に赴任したミス・ハリソンと、不幸な生い立ちながらミス・ハリソンの養女となりアメリカにわたった一人の少女の生涯を描いた映画上映会を開催しました。



120周年記念品

創立120周年を覚え、記念品を作成しました。記念品は120周年委員会メンバーが参加者への想いを込めて選定・デザインしたものです。各校式典の際に、参加者に贈られました。



式典関係者への記念品



在校生に贈られた記念品



自分自身を創造し平和を定義する、4泊5日の旅『沖縄平和学習』

10月10日(火)～14日(土)、高校2年生は沖縄平和学習へ行ってきました。生徒全員が「平和ガイドになる」というドライビングクエストを設定し、事前学習から数々の取り組みを行いました。現地では、米軍上陸地点から進軍ルート、当時の沖縄の官民の退却ルートを戦跡としてめぐり、ストーリーとして理解できるようにしました。また、沖縄平和祈念資料館のホールで平和礼拝を行い、沖縄が抱える社会課題に向き合う現地の方々をグループ単位で訪問し、体験を通した学びを行いました。



選定理由書の作成で論文執筆のトレーニング 高1探究学習授業

女子聖学院高等学校の探究学習では、高校1年生は論文を書くための前提となる「選定理由書」の作成をめざして、様々な作業とトレーニングを行なっています。選定理由書とは、自分が掲げたテーマを



「選定」した「理由」をまとめたレポートですが、単純に「なぜ、そのテーマに興味・関心を持ったのか」を書くではありません。1学期に設定したテーマについて、情報収集、発表、振り返りなどの作業を重ね、そのプロセスで自分の中に起こったテーマの捉え方の変化なども含め、構造化、文章化していきます。

10月には選定理由書の基本構造について学びました。11月は段落構成を踏まえた文章の書き方を学び、3学期の選定理由書の提出に向けて準備を進めています。そして高校2年生は論文の完成をめざすこととなります。



埼玉県主催

サーキュラーファッションショーに参画

11月14日(火)、埼玉県庁で開催されたイベント「県庁オープンデー」にて、サーキュラーファッションショーの企画運営を多くの企業と連携して行いました。本学のサステナビリティ推進センター(SSC)と学生団体Petite Arche(プチ・アルシュ)の学生が昨年大学で開催した古着ファッションショー「SEIG Fashion Revolution 2022」がきっかけとなり、今回のイベントの企画・実施に携わることとなりました。イベントを通して、古着を着ることがSDGsにつながっているというメッセージを発信する貴重な機会となりました。



2023年度第1回心理学研究講演会が開催されました

9月16日(土)、心理学研究講演会(聖学院大学総合研究所心理学研究分科会)がオンラインにて開催されました。玉井 仁氏(東京メンタルヘルス・カウンセリングセンター長)を講師にお招きし、「働く人々を支援することについて」と題し講演いただきました。心理士にできる働く人々への支援についてや、支援における組織理解、共同体制の重要性などが示されました。次回の講演会は、2024年1月30日(火)に開催の予定です。



聖学院小学校



初冠雪の富士山を「さんぽ」 ～2年生自然学校～

2年生は10月4日(水)から2泊3日の日程でYMCA東山荘(御殿場)での「自然学校」へ出発しました。小雨の中の出発でしたが、この雨は富士山にとって今シーズン初の雪だったようで、雨の上がった翌日には少しだけ雪をかぶった富士山を見ることができました。ハイライトは最終日の「ふじさんぽ」です。五合目までバスで行って、そこからさらに登り、雪の富士山をバックに昼食。そして午後は砂走をときには転がりながら一気に駆け下りるというワイルドな経験をしました。冬が訪れた最初の富士山を子どもたちは全身で満喫することができました。



雪をかぶった富士山をバックに、このあと2年生は五合目まで砂走を一気に駆け下ります

聖学院みどり幼稚園



「みどりの森のお店屋さん」としてオープン みどりフェスタが聖学院大学 ヴェリタス祭に初出店

みどりフェスタは、子どもたちの園生活へ豊かに還元されるようにという願いと共に、保護者会を中心に開催され続けてきたものです。企画、準備、当日の販売など、底力溢れるみどり幼稚園の保護者の皆さんによって、今年は11月3日(金・祝)に、素敵な「みどりの森のお店屋さん」としてオープンしました。大学のヴェリタス祭に合わせた開催という初めての試みの中、多くの方に支えられての時となりました。



聖学院幼稚園



秋の一日

秋晴れとなった10月13日(金)、年長組は親子でお芋掘りの遠足に出かけました。練馬区の光が丘公園近くの広い農園です。一生懸命に土を掘ると、大小さまざまなお芋が出てきました。お昼には青空の下、親子一緒においしいお弁当を食べました。食後はどんぐり拾いやお散歩、最後は公園内の広いトラックを思いっきり走るリレーで盛り上がりました。

その頃幼稚園では…年中組と年少組が仲良く手をつないで聖学院中高へお散歩に出かけました。金木犀のよい香りに包まれて子どもたちは「いいにおい!」。それぞれに秋を肌で感じた、思い出深い一日となりました。



年長組のお芋掘り。こんなお芋が出てきたよ!



年中・年少組のお散歩。お兄さんたちはどこにいるのかな?

編集後記

新型コロナウイルス感染拡大により、2020年度から全国的に在宅での学習スタイルが広がりました。私自身も小学生2人の親としてPCの立ち上げやZoomの設定、宿題の声かけ、昼食の用意などを経験しました。改めて気付かされたことは、学校は学びの場であるだけな

く、生活のインフラでもあり地域に欠かせない機能を担っているという視点です。今月号は、学校を地域との関わりから改めて捉え直し、現場での実践や可能性について取材しました。つながりの中で、聖学院らしい教育と貢献がこれからも続けられることを願います。(M)



|| 140th Anniversary of the
Disciples' mission to Japan ||

2023年、学校法人聖学院は創立120周年

1903年、現在の文京区本郷の地に誕生した神学校から

聖学院の歩みは始まりました

“神を仰ぎ 人に仕う”

この建学の精神を土台に

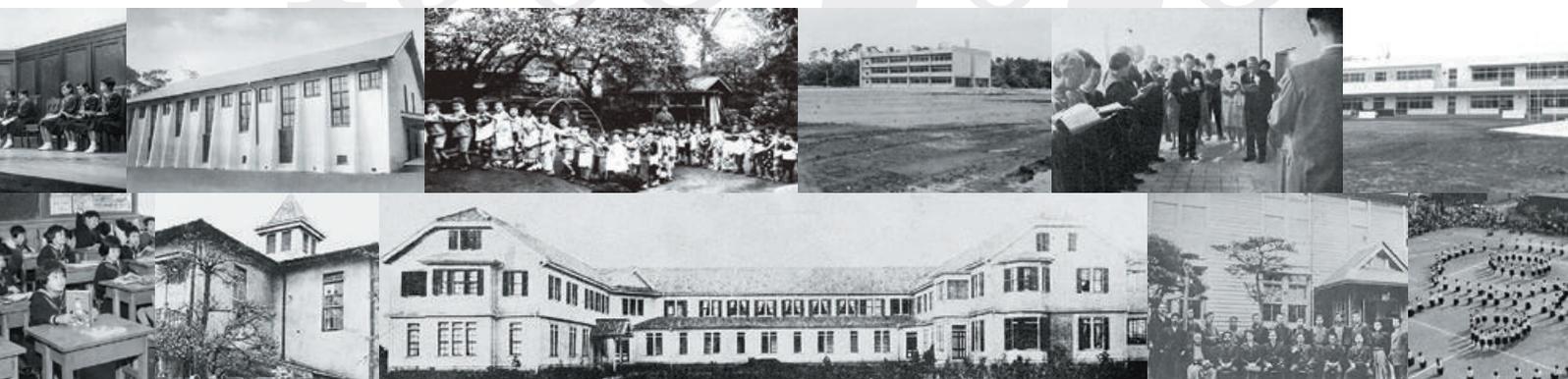
真理を探究すること、神と人間を知ること、社会に貢献することを目指し

「変えることのできるもの」と

「変えることのできないもの」を問いながら

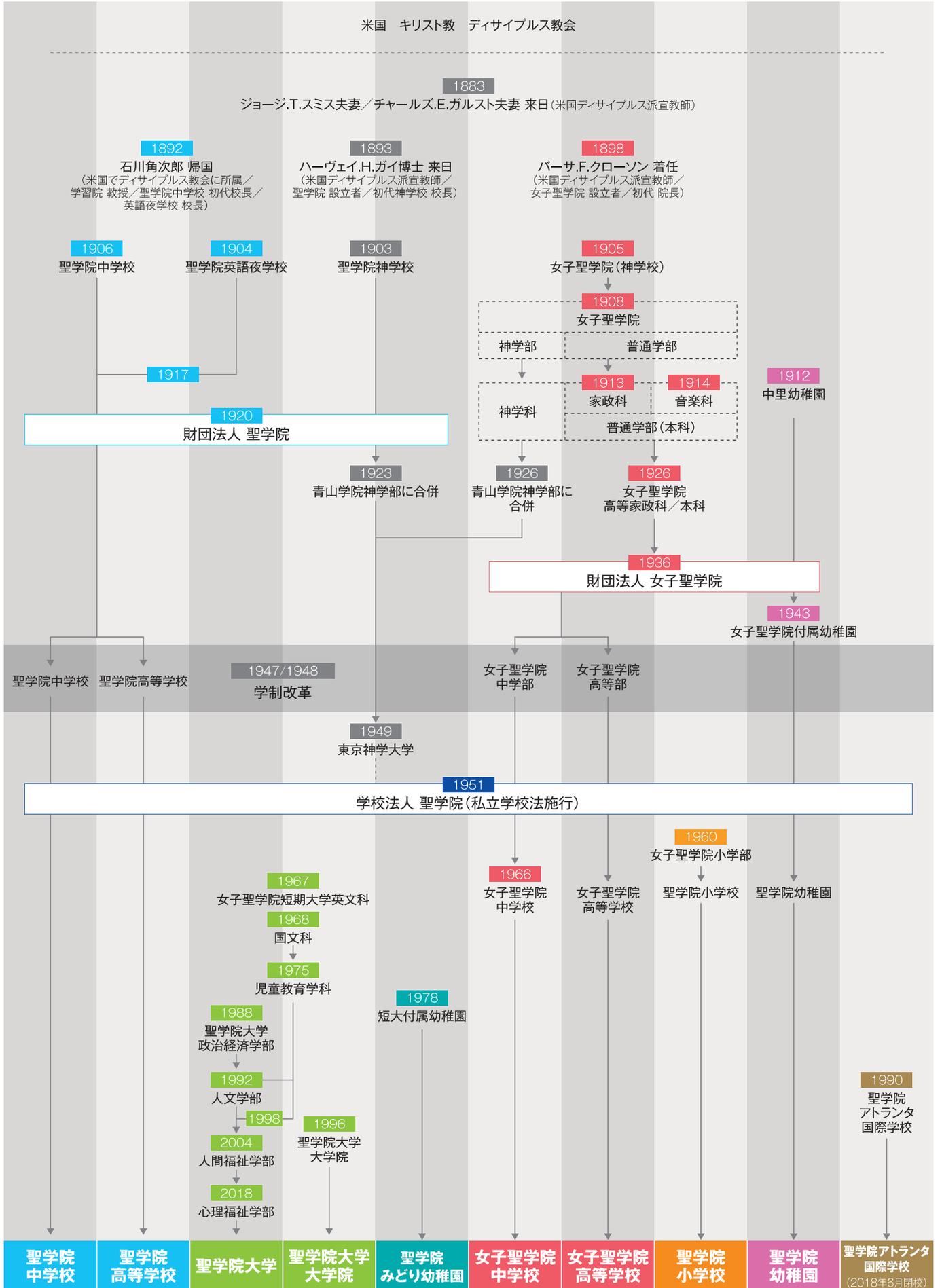
聖学院はこれからも歩み続けます

1903-2023



聖学院の歴史

History of Seigakuin University & Schools



聖学院歴史探訪

#23 聖学院教育 の歴史

- 聖学院の創設と発展
女子聖学院 3-



平井庸吉*1

平井庸吉も元々は牧師であったのですが、バーサ・クローソンにぜひにと求められて女子聖学院で教えるようになったのです。経済面でも人事の面でも本当に血のにじむような苦勞をした先生でした。しかも終始穏やかな表情を崩さず、信仰と愛をもって一人ひとりに接しました。平井庸吉の言葉を2つだけご紹介しておきます。いずれも卒業式の告辞の一部です。

「最後に一言付け加えて置きたい。諸姉がどこに行かれても、いかなる時にも常に二人の目に見える道連れのあることを忘れてはなりません。寂しき時、悲しき時、苦しき時、涙のあふれる時、ともに泣き、ともに苦しみ、ともに悩んで諸姉を慰め力づける二人の道づれのあることを記憶せられよ。一人は主イエス・キリスト、今一人は女子聖学院であります。諸姉の前途の祝福を祈る」。

「特に皆さんに希望することは、神の深い愛と、キリストの深い愛とを生業覚えて下さい。(中略) 十字架の死の深い愛を思え、今日まで胸につけた、十字架にJ・S・Gを組み合わせたる記事は、もはや不要になったが、魂の核心にこれを刻みつけなさい。十字架の心、犠牲愛をもって一生を貫いて下さい。さらば諸子よ、勇ましく門出をせよ、前途に幸多からんことを祈る」。

(次号に続く)

出典：聖学院キリスト教センター編『聖学院の精神と歴史』聖学院ゼネラル・サービス、2006年版(出典より一部変更)

*1イラスト制作：株式会社ジャパンシステムアート



学校法人 聖学院

理事長／小池 茂子 院長／山口 博
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-8351
ホームページ <https://www.seig.ac.jp/> E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学

・政治経済学部／政治経済学科
・人文学部／欧米文化学科 日本文化学科 子ども教育学科
・心理福祉学部／心理福祉学科
学長／小池 茂子 創立／1988年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院

政治政策学研究所／文化総合学研究所／心理福祉学研究所
創立／1996年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園

園長／赤田 直樹 創立／1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820 Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校

校長／伊藤 大輔 創立／1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校

校長／安藤 守 創立／1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-2277

聖学院小学校

校長／佐藤 慎 創立／1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1 Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園

園長／田村 一秋 創立／1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2 Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード (JCB、VISA、MasterCard、アメリカン・エクスプレス、ダイナースクラブ) での寄付が可能です。下記URL、QRコードにアクセスください。

<https://www.seig.ac.jp/asf/>



住所変更・広報誌の発送停止・PDF配信への変更・お問い合わせ

<https://www.seig.ac.jp/asf/contact/>

学校法人聖学院ASF事務局

Tel 03-3917-8530 (月～金 9:00～17:30)

